

# 教育思想の現在

## 斎藤喜博を超える試み（2）

鳴瀬 彰夫

斎藤喜博、向山洋一を検討してきて、続いて、村田栄一を取りあげたい。

村田栄一は、斎藤喜博の実践をまず、次のように評価する。

「国家権力が『伝達』として教育を捉えようとしている現在に」にあつて、斎藤は「『創造』というモメントにおいて教育を捉えかえしている」。

そのうえで、根底的な意味での「斎藤喜博批判」を展開するのである。

村田が、斎藤喜博と著しい対比を見せるのは、「授業の中での教師の立ち位置」である。

斎藤喜博にあつては、教師は生徒の前に「より高い質のもの」（真理）をもって立つ。その位置から教師は真理をかざして生徒に働きかけ、生徒のなかから可能性をひき出していくのである。斎藤は「生徒の前にたち、生徒を自分の方へ引っ張る」。教師をそのように位置づける。

このような位置をとる限り、つまり真理をあいだにはさんで教師と生徒が対置する関係では、両者がもっている背景であるとか、社会性などは問題とされない。

斎藤が教師・生徒というとき、そこでは教師・生徒という役割のみが問題とされていることに気がつく。どのような人間なのかよりも、どううまく教材を教える教師なのか、つまり、役割としての教師が問題にされているのである。抽象的な教師と生徒が登場して、斎藤のいう教育の場＝キョラカな世界ができあがる。す

べては、うまく教えること、「教授学」へと還元されていく。

村田栄一は、学級通信のなかで、「エンマ帳」「通信票」「時間割のワク」をぶっとばせ、と語りかける。学校生活の不可欠の部分として日常化しているものが、いかに、人間の感覚の次元まで深く入り込んでいるのかを映し出し、それに疑問を投げつける。疑問は、学校そのもの、授業そのもの、さらには「教師であるべく自身」にまで突きつけられるものになる。

具体的に、1969年に小学1年生を前にして行われた授業を中心とする教育実践を見ていこう。その時に出された「学級通信・ガリバー」<sup>(註1)</sup>のなかのエピソードに彼「村田先生」の姿を見ていこう。

村田は学級通信「ガリバー」を次のように紹介している。

一年ぼうずのあいだにはいていくと、なんだか子どもたちが足もとにまつわりつくような気がして、ぼくは「小人の国」へ漂着したガリバーになったような感じです。スウフィットが「ガリバー旅行記」を書くことによって、じつはイギリス社会の真実を鋭く描き出したことにならって、そのありかたが根底から批判されている日本教育の「旅行記」が書けないだろうか、とぼくは考えました。

——（「学級通信・ガリバー」まえがき）——

## ディナー・ベルで始まる授業

「チリン、チリン」。村田先生のクラスでは、授業は日直の生徒が鳴らすディナー・ベルの澄んだ音とともに始まります。学校では、時間割に従って、いろいろな教科が万遍なく行われるべきだ、という「疑うべきもない信仰」があります。

しかし、村田先生は、「低学年は、今のよういきなりと教科に分化させないで、もっと総合的なカリキュラムが組まれるべきだ」「教師は、自分の学級の時間割をもっと大胆に改変すべきだ」と考えます。その場合、45分ごとに鳴るチャイムよりも、小刻みで、融通性のある「自家製のディナー・ベル」のほうが、ふさわしいのです。

学校中の各教室で、チャイムと併せて、それぞれの「ベル」が個性的な学習のリズムを奏でるとき、教育は生き生きとした共鳴の中で生命を獲得するのです。

（「ガリバー」38号）

## 夕立のように叱る

朝、村田先生が教室に行くと、6年生の生活部員がクラスの生徒たちに紙芝居を見せてくれています。あす続きをやってくれるように頼んで、中断してもらいました。子どもたちは不満顔です。6年生に向かって「ケチ、ケチ、ケチ」の声が上がります。

さあ、ここが勝負のしどころです。大きく息を吸って一発「ダメレ!」。びっくりするような大声です。機制を制すると、静かにつめたい調子で「いま、六年生に『ケチ』と言った子立ちなさい」と言い放ちました。雷のあとだけに次は何がでるか分からない。おたがいに顔を見合わせるばかり…

ここはひとつ、先生のオッカナイところをバッチリ印象づけねばなりません。座ったままトボケルのを許さぬキビシサをはっきり見せつけねばなりません。そして、朝自習、給食、掃除などに来る上級生をカラカウ態度の芽をつみとらねばなりません。

最初のお説教だけに、よけいに演技力が必要です。「叱る」ことを通して全部の子どもに対して多くのことを、一挙に、鮮明にやきつけねばならないのです。

（「ガリバー」4号）

要するに、「お説教は、夕立ちのように強烈でさわやかなものでありたい」と村田先生は言う。言いえて妙なたとえある。ムシムシした夏の夕暮れに、ピカッと光る雷とともに、サーと降る夕立ち。夕立ちの通り過ぎた後には何かすがすがしさが残っている。同じように、生徒も、叱られた事柄がわかって、「もうやらないぞ」と納得する。叱ったものも、叱られたものも、ふとすがしさを感じるお説教。

それと対比するようなお説教を、村田は他の箇所でも指摘している。それは「最初の2週間ほど、子どもの言動の細部にわたって細かい指示を出し、つねに先手をとって指示することで自分のペースにのせる」ベテランの先生のやり方である。

「この細かい指示というのがミソなのだ。よく、『箸のあげおろし』と形容されるように動作の細部にわたる画一化と統制の方が、大音声のカミナリよりもずっと効くのである。」

しかし、このような子どもの扱いを続けていけば、次第に、子どもが表情をなくしていくだろう。「管理社会」というのは、人間の持っている総体をできるだけ要素化して、それをパターン化していくことで貫徹していく。村田は、このような管理化のスタイルに対決していく。

斎藤喜博は「生徒の前にたち生徒を自分の方へ引っ張る」と述べた。それに対して、村田は

生徒の後ろにいて、「支えながら、そつと前に押してやる」のである。

村田は、むしろ意識的に、後手、後手へとまわることで、ハプニングを待ちうけるようである。問題を起こす子どもを「問題児」ではなく、「問題提出児」と読みかえていこうとしている。

## 便所騒動記

スカートをまくる「モーレツごっこ」がエスカレートして、女子便所に「のぞき」に行くという直接行動が出てきました。便所の戸の下から、男の子がのぞいているというわけです。村田先生は生徒たちと話し合いをしますが、男の子たちの答えは、ずいぶんとアッケラカンとしたものです。女の子たちも笑いだします。話し合いがお終わるころ、「悪童」たちのひとりが、「オシッコに行ってきます」と言って、教室から出ていきました。

(ちなみに、オシッコに許可は入りません。授業中でも「オシッコに行ってきます」と告げて、生徒たちは教室から出ていきます。許可制にともなう威圧感なしに、だんだんに自分で調節するにしむけていく方が、時間がかかっても、「人間」を育てることになると村田先生は考えているからです。)

さあ、今度は村田先生のいたずらの番です。先生は、まわりの女の子たちに「はるきくん、オシッコだってよ」と、ナゾをかけます。「そうだ、見にいこう」とひとりが感度よく了解し、「はるきくんだって、のぞいたんだから女の子がのぞきに行っても文句言えないよ。行こう。」とアジります。ただちに女の子たちの一団が、はるきくんを追います。

便所でどうなったのか。これは容易に想像つきます。女子便所とちがって、障壁のないところで、女の子たちに囲まれて、「サア、やってみろ」「見せてよ」と迫られた加藤くん。こればかりは、必要にせま

られてやってきたところですかから、「ヤーマタ、あとにしよう」というわけにはいきません。

さんざん逃げまわった末、ついに、「伝家の宝刀」ひき抜いて、「寄るナツ。寄らばひっかけるゾツ」と、ひとまわり「威嚇」したのだそうです。そこで女の子たち「見イちゃった。見イちゃった」と、はやしたてることになったというわけです。

恐慌をきたしたのは、他の「ノゾキ」諸君。「先生。ボクも行きたいんだけど」と、前を押さえてウロウロしています。「エンリョしないで行っておいでよ。おシッコがまんすとからだに毒だよ。」

「ウーン、チキショー」と、ジタバタするさまを見て、女の子たち愉快そうにガラガラ笑っています。

—————(「ガリバー」26号)—————

村田は、子どもたちを「挑発」する。生徒たちの中に混乱をつくりだして、そのなかから起こるハプニングを待つ。このときに、斎藤喜博のように、より質の高いものへと至るものだけを取りだそうとはしない。彼は、子どもの行為全体をまるごと受けとめるのである。

それは、こどもへのオブチミスチックな信頼に裏打ちされている。

人間は、長い間、「性」を押し込めてきた。当然、教育の分野でも、「性」はタブー視されてきた。

村田は、生徒のセックスに対する感覚を押し込めようとはしない。それを表面にひきだして、あつけらかんと(自然に、という意味である)、それを受けとめていく。

村田は、「性」を子どもの興味から隠してしまうのではなく、まともにそれを直視することで、子どもの感覚を豊かにしていくきっかけにしようとする。

念のために述べておけば、村田は性教育をおこなうのではない。ハプニングのなかで、子ど

もの「性」に関する興味がでてきたときに、それにつきあっていくのである。彼には、子どもの提出することは、それがなんであっても、まるごとつかんで、つきあっていく姿勢がある。——それは、学校をキヨラカナ場とする斉藤喜博には考えられないことである。

## 全員百点主義でいこう

村田先生の授業の一コマである。

子どもが持ち帰る答案を見て、その「汚れ」っぷりにおどろくことはありませんか。

赤いマルや青いマル、何重ものバツ、消しゴムのくず、こすりすぎた破れ、そして、幼い筆跡の「100点」。

テストが始まると、しばらくは、静かに緊張した空気がみなぎり、それを破るように「できた」というささやき(この『できたッ』を、叫びから ささやきにするまでがたいへんだった)がもれてきます。ある程度、早くできた子に足ぶみをさせておいて、それが5、6人になった頃を見はからって「点をつけるよ」と宣言します。

第一次の採点は、赤ペンです。トップ・グループの採点がすんだところで、その中の満点をとった子に青い採点用鉛筆を渡します。「青いマルつけ屋」さんの開店です。

赤い百点をとれなかった子は、席に戻って考え直し、百点になるまで、「青いマルつけ屋」さんに通います。

トップに続く第二グループのなかから、理解の確実そうな数人を指名して「赤いマルつけ屋」さんを、バトン・タッチして、僕は、苦闘中の机を回って、個人指導をしながら、「どこで、どんなつまずき方をしているのか」を把握します。そして、採点基準の許容度を「マルつけ屋」さんに知らせます。つまり、事後指導のポイントをつかみながら、「応援団」の仕事もするわけです。

その頃には、「赤」「青」を問わず、とにかく「百点」が続出してきて、「できた子」と「できない子」に、教室ははっきり二分

されます。

そこで、「家庭教師」作戦に移行します。

百点をとって、友だちの相談にのってやると名乗りでた一団の中から、まだ百点に至らずに苦しんでいる子が「家庭教師」を指名します。

こうして、自分で考えこむ子、「マルつけ屋」さんのところで誤りを指摘され説明をうけている子、隣に相談役を座らせて教えてもらっている子……というように、複雑なコミュニケーションの気流が教室に流れていきます。

——(「ガリバー」33号)——

村田は「百点主義」の言葉で、「点取り主義」を強調するわけでは無論ない。「全員に確実な知識や理解を」身につけることをこえて、『百点』までねばり抜き、百点に至らねば満足しない『百点感覚』とでも言うべき感性」を育てたいという。

ここから村田先生は、父母に語りかける。挑発する。

「70点」などという答案が返されたとき、「ああ、そうか、オレは70点か」とそのまましまいこむのではなくやり返して、「100点」にして帰るようであればいけないし、「70点。もうすこしがんばれ」などとフヤケタことを言わずに「残りの30点を先生からモギ取ってこい」とハッパをかけるぐらいの親であってほしいと思います。

——(「ガリバー」33B号)——

「うちの子も百点にしてくれ」と要求することは、まともな要求であり、権利なのである。このように村田は主張する。

ただ、現実はどうか。

「ぼくたち教師は、今、このように要求されると、たちまち恐慌をきたすような悪条件と能

力喪失の状態にあります」。

村田先生は、だからこそ、すべての子は「選別」の対象ではなく、「成長・発達」の対象なのだ」と切りかえ、そのうえで親と提携していくことが大切だとしている。

教師の仕事というものは、子どもを、上・中・下などと「振り分ける」のではなくて、一人残らず「たいへんよくできました」と言えるようにすることなのだ、たとえそれがどんな困難であっても、「振り分け」に自己満足する姿勢とはキッパリ絶縁せねばならない。

—（「ガリバー」33号）—

「どの子どもも百点にする」というタテマエを逆手にとって、村田は「教師の仕事の問題点」を照射する。

「ガリバー」には、いろいろな人間が、生き生きとたち現れる。生徒たちの作文はもちろんであるが、親からの手紙、生徒が出た保育園の先生、同僚の先生、卒業生から便りが登場し、次第に、その輪をひろげていく。教室での出来事の波が増幅されて、また学級通信に反映されていく中で、ひとつの「世界」が形づけられていく。

学級通信「ガリバー」を見ていると、村田先生は、そこに新しい授業のスタイルを、子どもたちとのあいだにつくりあげようとしているようである。

そこでの「教育」は、教える・教えられる関係ではなく、「きょういく＝共育（共に育つ）」営みと思われてくる。

村田栄一 川崎市の藤崎小学校、向丘小学校で  
22年間教職につく。

1980年に退職。

（注1）「学級通信・ガリバー」（1973年 社会評論社）

これは「飛びだせチビッコ」（1970年 エール出版）を改訂したもの